
誰なのアナタ

西崎想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰なのアナタ

【Nコード】

N3631Z

【作者名】

西崎想

【あらすじ】

試験勉強があるのに、風邪を引いてしまった私、りさは、友達から教えてもらった、おまじないをする。すると、私の手から、影りさが出てきて……。

りさは影りさ？

「あゝあ」

私はため息を吐いた。

私の名前はりさ。今年で18歳になる。高校生の最後の秋。

「やだなあ、もう」

私の落胆の理由は、（風邪）を引いたこと、である。

私はよく、体調を崩す。

そして、大イベントを何回もおじゃんにしている。

今回は、（試験の前の日）だ。

追試なんかあったら、大学試験のスタートラインに、出遅れてしまう。

そうだ。

あれ、試そうかな……。

そう思い、私は、友達から教えてもらった、ある、おまじないを試みることに。

「確か……こう」

手を合わすと……。

カッ！

私の手が光った。

「え！？」

お次は、手から煙が……。

シュウウウ……

「な……な……」

その煙は、一か所に集まっていくな。

「ひ……人？」

そう、人を形どっていく。

私は腰の力を失って、へたり込んだ。

目を開く人、それは、私によく似た……。

「ひゃ……」

私によく似た人は、一瞬そう笑って、

「こんにちは」

そう言った。

「あ、アナタ、なに？」

私はそういうと、

「あー、自分で呼んでおいて、そんなこと言うのと、恨めしげに言う、人。」

「私は、りさ」

「わ、私がりさよ！なによ」

そう、当然の主張をする私。

「私は、りさ……と、いつでも、そうねえ……」
少し考える、もう一人のりさ。

「そう、影りさ、ってところね」

「影りさ……？」

「そう、影りさよ」

そう言つて、影りさはすつと、手を前に出すと……、
「貴方を助けに来ました」

そついうと、影りさは、ひゃひゃと笑つた。

「私、腰が抜けて……」

私がそついうと、影りさは、面白がつて、

「ひゃ、これが貴方の勉強机ね」

「私の勉強机を……」

私は、かろつじて立ち上がった。

「返して！」

私は、影りさに飛び掛かつた。

「おつと、ごめんごめん」

「私は、今から勉強しなきゃいけないの」

私は、影りさにそつ言つた。

すると、影りさは、ひゃひゃつと笑い、

「私がするわ、勉強」

「え？」

「その為に私を呼んだんでしょ？私、貴方を助けに来たのよ？」

「う、嘘」

「嘘じゃないわ、ひゃひゃ」

「そつね、貴方は休んでなさい。後は私が……」

そついうと、影りさは、私の身体を押した。

「え……？」

そのまま、私は暗黒の世界に入った。いや、入れられた。

「影りさー!」

暗黒の中から、私はそう叫んだ。

すると、影りさは、にやあゝと笑って、

「貴方、今は貴方が影りさよ」

そう言っ、ひゃひゃと笑った。

「……!」

「まあ、そこで、おとなしくしてなさい、りさ」

「な、なによ!影りさ!私をここから出しなさい!」

「ひゃひゃ、試験が終わるまでよ。大丈夫、そしたら出したげるわ」

「あんた、私に乗っ取ろうと……」

「だあいじょうぶ、信用しなさい、私を」

暗闇……、

どこまで……どこまで、続くのか……。

わたし……を、出して……。

そう思っていたのは、いつなのか……。

その瞬間、天地が入れ替わった。

「え……?」

そこは、私の部屋。

「も……も」

戻ってきたのだ。

「か、影りさは……」

影りさは、どこにもいない。

そうして、あくる朝、

試験の結果、私は、赤点を取らず、大学に望みをつないだ。

この子……影りさ？（前書き）

二作品目です。

緊張してます。が、楽しいです。

また書きます。

よろしくお願いします。

この子……影りさ？

私はりさ。大学生。

身長は155？くらい。髪は長く、少し茶色いかな。

樟葉国際大学にはれて入れた私は、意気揚々。

綺麗な校舎。新しい、大学は、いつも、胸がすく思いだ。

一時間目。

受けに来た私は席に座った。

綺麗な教室だなあ。

そう思っていたら、

「こんにちは、私、かいていうの。よろしく」

「私は、りさ」

上品な娘が来た。かい……か。

「貴方によく似た子が、隣のクラスにいるの、知ってる？」

「ふうん、知らなかった」

「あとで、見たらいいよ」

「うん、そうする」

そうか、そんな人、いたんだ。

「かいさん、ここって、先生かつこいい人、多いよね」

「そうなのよう」

そんな話をしていたら、授業が始まるチャイムが。

一時限目が終わり、私は、トイレへ。

そつだ、隣のクラス……か。

ここかあ……、私に似てるのか。

そして、それを見つけた私は、

びっくりした。

あんなに、似ているなんてもんじゃない。

あれ、

影りさ？

月風 まいむ

教室へ入った私は、

「影りさ!」

と、怒鳴った。

ざわざわ……、

辺りが異変に気が付き、ざわめき始める。

「……?」

影りさは、びっくりした様子で、私を見た。

「……あなた……だれ?」

え……?

私も、影りさと思っていたものの反応に、戸惑いが生じた。

影りさじゃ、ないのかな。

「貴方、名前は?」

私は影りさに訪ねた。

「……月風 まいむ」

そう言った、影りさ……まいむは、

「貴方こそ……誰?」

と、言った。

「私は、りさ。庄野りさよ」

「……ふうん」

そう言って、まいむは私をじろじろ見つめ始めた。

「あ……」

私は、顔がカアーツと赤くなるのを感じた。

「ご、ごめんなさい、知ってる人に顔が似てたから……」

「……そう」

「ご、ごめんね、えっと……」

少し考えて、

「まいむさん」

と、あえて名前を出した。

「……もう、授業の時間よ」

と、まいむ。りさはびっくりした。

「あ……じゃ、じゃあ……ほんとにごめんね」

そう言って、私は、教室を移動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3631z/>

誰なのアナタ

2011年12月14日05時47分発行